

2013年7月6日説教

題：「うぬぼれによるキリスト不在の心」

花城健

讃美歌 73 番

讃美歌 248 番

主を恐れることは知恵の教訓である、謙遜は、栄誉に先だつ。—箴言 15:33

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に 住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかす』(イザヤ書 57:15)。

大声で言った、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。—黙示録 14:7

ダニエル 4:29 十二か月を経て後、王がバビロンの王宮の屋上を歩いていたとき、4:30 王は自ら言った、「この大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもって建てた王城であって、わが威光を輝かすものではないか」。

高慢はバビロンの王だけの問題か？

ヒゼキヤ王：①聖所と過越しの祭の回復、②アッシリアからの解放、③大病の卑しの後、高慢と自惚れ

参考：イザヤ 39 章、王下 19-20 章、歴下 32 章、国上 303~

背景：北王国、偶像礼拝の結果、アッシリアに支配される

イスラエルの人々は、はなはだしく「その神、主にむかって罪を犯し、……悪事を行って」「彼らは聞きいれず、……主の定めを捨て、主が彼らの先祖たちと結ばれた契約を破り、また彼らに与えられた警告を軽んじ」た。「彼らはその神、主のすべての戒めを捨て、自分のために2つの子牛の像を鋳て造り、またアシラ像を造り、天の万象を拝み、かつバアルに仕え」、頑強に悔い改めることを拒み続けたために、「主は……彼らを苦しめ、彼らを略奪者の手にわたして、ついに彼らをみ前から打ちすてられた」。「ついに主はそのしもべである預言者たちによって」明らかに警告されたとおりになされた(列王紀下 17：-11、14、15、16、20、23)。

①聖所と過越しの祭の回復

南王国の王ヒゼキヤは、エルサレムの神殿を清め、過越しの祭を回復し、ダビデがすべてなしたように主の良しと見られることをした。

ヒゼキヤ王はイスラエルとユダヤに使者を送り、神に対して悔い改め、服従し、過越祭に集まるよう求めた。歴代志下 29、30 章参照

②大国アッシリヤからの解放

ヒゼキヤ王はセナケリブの脅迫状を受け取った時、それを神殿に持っていき、主の前に広げ、救いを祈った。その夜、主の使が出て、アッシリヤの陣営で 18 万 5 千人を撃ち殺した。列王記下 19:34, 35 参照

王下 19:34 わたしは自分のため、またわたしのしもべダビデのためにこの町を守って、これを救うであろう』。 19:35 その夜、主の使が出て、アッシリヤの陣営で十八万五千人を撃ち殺した。人々が朝早く起きて見ると、彼らは皆、死体となっていた。

③大病の卑し

王下 20:1-10 朗読

王下 20:8 ヒゼキヤはイザヤに言った、「主がわたしをいやされる事と、三日目にわたしが主の家に上ることについて、どんなしるしがありましょうか」。

20:9 イザヤは言った、「主が約束されたことを行われることについては、主からこのしるしを得られるでしょう。すなわち日影が十度進むか、あるいは十度退くかです」。

20:10 ヒゼキヤは答えた、「日影が十度進むことはたやすい事です。むしろ日影を十度退かせてください」。

20:11 そこで預言者イザヤが主に呼ばわると、アハズの日時計の上に進んだ日影を、十度退かせられた。

その後の失敗、メロダクバラダンからの使節への対応

王下 20:12-19

国下 308 から

バビロンから使節が送られた理由

チグリスとユーフラテ川にはさまれた肥沃な流域に、当時アッシリヤに属してはいたが、世界を支配する運命にあった古代民族が住んでいた。その国民の中に、熱心に天文学を研究していた賢者たちがあった。そして彼らは、日時計の影が 10 度退いたことに気づいた時に大いに驚いた。彼らの王メロダク・バラダンは、天の神がユダの王の寿命を延ばされたしるしに、神がこの奇跡を彼にお与えになったことを聞いてヒゼキヤに使者を送り、彼の回復を祝うとともに、できることならばこのように大きな奇跡を行うことができる神についてもっと学びたいと思った。

もしバビロンの使者たちに神に賛美をすることを教えることができたなら・・・

遠国の王からのこれらの使者たちの訪問は、生ける神を賛美する機会をヒゼキヤに与えたのである。彼がすべての造られたものを支えておられる神について語ることは、何と容易なことであったことだろう。その神の恵みによって、全く絶望的であった彼自身の生命が助けられたのである。カルデヤの平原から来たこれらの真理の探究者たちが、生ける神の最高の支配権を認めるように導かれたならば、何と大きな変化が起こったことであろう。

ヒゼキヤを捉えた誇りとうぬぼれ

しかし、誇りと虚栄 (vanity=うぬぼれ) がヒゼキヤの心を捕らえた。そして彼は得意気に、強欲な人々の目の前に神がお与えになった、神の民の宝を開いて見せた。王は、「宝物の蔵、金銀、香料、貴重な油および武器倉、ならびにその倉庫にあるすべての物を彼らに見せた。家にある物も、国にある物も、ヒゼキヤが彼らに見せない物は1つもなかった」(同 39 : 2)。彼がこうしたのは、神に栄光を帰するためではなくて、外国の君たちの前で自分を高めるためであった。彼はこの人々が、神を恐れることも愛することもしない強大な国家の代表者であることを考慮しなかった。そして、彼が彼らを信じて国家の物質的富を見せたことは分別のないことであった。

使者たちがヒゼキヤを訪問したことは、彼の感謝と献身を試すためであった。次のように記録されている。「しかしバビロンの君たちが使者をつかわして、この国にあった、しるしについて尋ねさせた時には、神は彼を試みて、彼の心にあることを、ことごとく知るために彼を捨て置かれた」(歴代志下 32 : 31)。もしヒゼキヤが、イスラエルの神の力と恵みと憐れみについてあかしを立てるために、彼に与えられた機会を活用したならば、使者たちの報告は暗黒を照らす光となったことであろう。しかし彼は、万軍の主よりも自分自身を賛美したのである。「しかしヒゼキヤはその受けた恵みに報いることをせず、その心が高ぶった」(歴代志下 32 : 25 上句)。

彼らが見た宝の報告

何と悲惨な結果が起ころうとしていたことであろう。帰国する使者たちは、彼らが見た富の報告を持ち帰ろうとしていた。そしてバビロンの王と大臣たちは、エルサレムの宝によって自分たちを富まそうと計画するであろうということがイザヤに示された。ヒゼキヤははなはだしい罪を犯した。「怒りが彼とユダおよびエルサレムに臨もうとした」のである(同 32 : 25 下句)。

イザヤの譴責

「時に預言者イザヤはこのヒゼキヤ王のもとに来て言った、『あの人々は何を言いましたか。どこから来たのですか』。ヒゼキヤは言った、『彼らは遠い国から、すなわちバビロンから来たのです』。イザヤは言った、『彼らは、あなたの家で何を見ましたか』。ヒゼキヤは答えて言った、『彼らは、わたしの家にある物を皆見ました。倉庫のうちには、彼らに見せなかった物は1つありません』。

悲惨な結果の結果

そこでイザヤはヒゼキヤに言った、『万軍の主の言葉を聞きなさい。見よ、すべてあなたの家にある物およびあなたの先祖たちが今日までに積みたくわえた物がバビロンに運び去られる日が来る。何も残るものはない、と主が言われます。また、あなたの身から出るあなたの子たちも連れ去られて、バビロンの王の宮殿において宦官かんがんとなるでしょう』。ヒゼキヤはイザヤに言った、『あなたが言われた主の言葉は結構です』(イザヤ 39 : 3 - 8)。

ヒゼキヤの悔恨

ヒゼキヤは悔恨^{かいこん}の念に満たされ、「その心の高ぶりを悔いてへりくだり、またエルサレムの住民も同様にしたので、主の怒りは、ヒゼキヤの世には彼らに臨まなかった」(歴代志下32：26)。しかし悪種の種はまかれたのであった。そして、やがてそれは芽生えて、荒廃と悲哀という収穫を実らせるのであった。ユダの王はその後の年月の間、過去の償^{つぐな}いのためと彼が仕える神のみ名の栄えのために着実に歩んだので、大いに繁栄するのであった。しかし彼の信仰は激しく試みられるのであった。そして彼は、主に全く信頼することによってのみ、彼を破滅に陥れ、彼の民を全滅させようとしていた悪の勢力に勝利することができることを学ぶのであった。

人々は私たちの宝を欲しが。私たちの宝は何か？

使者たちの訪問に当たってヒゼキヤが自分に与えられた信任に背いた物語は、すべてのものに重大な教訓を教えている。われわれは自分たちの経験の中の尊い出来事、神の憐れみといつくしみ、また、救い主の愛の比類のない深さなどについて、これまでよりもっと多く語らなければならない。われわれの心と思いが神の愛に満たされている時に、霊的生活のことを他の人々に伝えることは難しくなくなる。偉大な思想、高尚な熱望、真理についての明快な理解、無我の目的、敬虔な生活と聖潔への願望などは言葉となってあらわれ、心に秘められた宝がどんなものであるかを示すのである。

チャンスをのがしてはならない

われわれが日ごとに交わる人々は、われわれの助けと指導を必要としている。彼らの心は、折にかなって語られる言葉に力づけられる状態にあることであろう。これらの人々の中には、明日ふたたび接することができなくなってしまう者であろう。われわれはこれらの旅の道づれに、どんな感化を及ぼしていることであろうか。

唇に門番の必要

われわれは日ごとの生活において負わなければならない義務が与えられている。毎日われわれの言行は、交わる人々に印象を与えている。われわれの唇に門番をおき、われわれの歩みを注意深く見守ることが何と必要なことであろう。1つの軽率な行為、1つの分別を欠いた歩み、また何か強い誘惑の波が押し寄せて、人を墮落の道に流してしまうのである。われわれは人々の心の中に植えつけた思いを、拾い集めることはできない。もしそれが悪いものであれば、われわれは一連の出来事、悪の潮流を始動させたのであって、それを止める力はわれわれにはないのである。

良い宝をみせるなら・・・

他方もしわれわれが自分たちの模範によって、正しい原則を発達させるように他の人々を助けたとすれば、われわれは彼らに善を行う力を与えるのである。今度は彼らが同様の有益な感化を、他の人々に及ぼすのである。こうして幾百幾千という人々が、われわれの無意識の感化によって助けられるのである。キリストの真の弟子は接触するすべての人の、善を行おうとする精神を強める。神を信ぜず罪を愛する世界の前で、彼は神の恵みの力と神の品性の完全さをあらわすのである。

子供が歌った讃美歌♪私たちの心、きれいでしょうか？聖書の鏡で見てください。自慢をしていないか？

褒めることに関して世の考え方の一つ

資料：<http://blog.be-open.net/education/praise-children-one-thing/>

こんな褒め方は逆効果に！

褒め方によっては褒めることが逆効果になってしまうことが実験に明らかになっています。実験はアメリカのコロンビア大学で行われました。

不特定多数の子供たちを400人以上集めて、知能テストを行ったそうです。子供たちには知能テストの実際の採点結果は教えずに、80%正解できたと伝えたそうです。

まず2つのグループに子供たちを分けて

1. 第1グループにはこんなに問題が解けたのは「本当に頭がいい」証拠だと話した。
2. 第2グループには何も言わなかった。

■実験

この2つのグループに次の課題を与える。2つある課題のうち1つを選ばなければならない。

課題1・・・非常に難しく解けない可能性もある。反面、やりがいがあり、新しいことを学べる。

課題2・・・簡単でスラスラ解ける。反面、学びはない。

■結果

頭がいいと褒められた子供は65%が簡単な課題を選んだ

褒められなかった子供は45%が簡単な課題を選んだ

頭がいいと褒められた子供は困難に立ち向かうのを避け、やさしい方を選ぶ傾向が強かった。

この後も実験は続いたのですが、褒められた子はいい結果がでませんでした。実験について詳しくはその科学が成功を決めるに書かれています。

なぜこのような結果になったのでしょうか。

頭がいいと褒められた子供は、気分はよくなるが、同時に失敗を恐れるようになる。成功しなかったら格好が悪いと考え、むずかしい問題への挑戦を避ける。

しかも頭がいいと言われた場合、自分はんばらなくてもよくできると思いがちである。そのため必要な努力をしなくなり、結果として余計失敗する割合が高くなる。

そして不幸にして実際に悪い成績をとると、子供は完全にヤル気を無くし、無力感に襲われる。

教育 279、280

どの子供の心にも特につちかわれて宿らなければならない特性の一つは、おのれを忘れる精神である。それは知らず知らずのうちに人生を美しくする。これはすべてのすぐれた品性の中で最も美しいもののひとつであり、人生のあらゆる真実な働きをなすにあたって欠くことのできない資格の一つである。

教育 280

子供たちに感謝し同情し、彼らを励ますことは必要であるが、ほめられることの好きな精神を育てることのないように注意しなければならない。自分の子供に人の注意をひいたり、目の前で子供のりこうな言葉をくりかえしたりすることは賢明ではない。親や教師が、子供について真に理想的な品性や将来の業績の可能性を念頭におくなら、子供にうぬぼれの気持ちを抱かせたり助長したりしてはならない。自分の才能や優越を人の前に誇示したいという気持ちや努力を彼らの中に助長してはならない。自分自身よりもいっそう高いところを見ている者はけんそんである。しかしまた彼は外面的な誇示や偉い人間の前にはずかしがったり度を失ったりするようなことのない威厳を持っている。

チャイルドガイダンス 135

うぬぼれの種まき— 多くの家庭ではほとんど幼児期に、うぬぼれと利己心の種が、子供の心にまかれてしまいます。あどけない片言や動作が、子供たちの目の前であれこれ言ってほめられ、大げさに繰り返されて他の人たちに伝えられます。子供はこれに気がついて、得意になります。大人が話している時も割り込んできてじゃまをするようになり、厚かましく生意気な子供になっていきます。ご機嫌とりと溺愛がうぬぼれとわがママを助長し、ついには親を含めて家族全体が小さな子供の言いなりになってしまふということが、しばしば見受けられます。このような教育によって形づくられた傾向は、子供が大きくなってもっと成熟した判断力を持つようになってからでも、捨て去ることができません。それは子供の成長と共に育ち、赤ん坊の時にはかわいく思えたことも、大人になると不愉快なことになってきます。このような人たちは、人々を自分の思い通りにしたがりと、もし思い通りにならないと、自分が不当な扱いを受け、侮辱されたように考えてしまいます。小さい時に、人生の困難や労苦に耐えるのに必要な克己心を教えられないで、思う存分甘やかされていたために、こうなってしまったのです。

ペテロの経験

キ実 132、133

ペテロは、弟子になった始めは自分の強さをほこっていた。自分自身の評価によれば、彼もパリサイ人と同じように、「ほかの人たちのよう」ではないと考えた。キリストはあの裏切りの夜、弟子たちに警告を発して、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう」といわれたが、その時も、ペテロは「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」と確信にみちて言った(マルコ 14:27、29)。ペテロは、自分の危険な状態を知らなかった。彼をおとし入れたのは自己過信であった。彼は、自分の力で誘惑に対抗できると思っていたけれども、わずか数時間後に試練がきた時に、ののしりと誓いの言

葉とともに主を拒んだのである。

・・・彼の心をくだいたのはキリストのその時の表情であった。・・・

こうして、ペテロの自己過信はうせた。彼は、2度と高慢な言葉を口に出さなくなった。

キリストは、復活後、3回もペテロを試みられた。「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」といわれた。ペテロは、もはや兄弟たち以上に、自分を高めてはいなかった。彼は自分の心を読むことができるお方に訴えて、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」といったのである(ヨハネ 21:15、17)。

最も絶望的な罪、高慢と自惚れ

キ実 134, 135

ペテロを失敗におとし入れ、パリサイ人を神との交わりに入れさせなかったその罪が、今日、幾千という人を滅びにおとし入れている。高慢とうぬぼれほど神がおきらいになるものはなく、また人の魂を危険にさらすものはない。あらゆる罪の中で、これほど絶望的でどうにもならないものはない。

・・・救い主を受け入れた者は、たとえどんなにまじめな改心者であっても、わたしたちは救われている、と言ったり、また、感じたりするように その人びとに教えるはならない。これは、誤解を招きやすい。もちろん、わたしたちは、すべての者に希望と信仰ををいさくように教えなければならない。しかし、みずからをキリストにささげ、キリストに受け入れられたことを知ってもなお、わたしたちは、誘惑の手のとどかないところにいるわけではない。・・・

人がまず初めにキリストを受け入れ、心に確信をいだき始め、自分は救われたのだというときに、自己に依存する危険がある。彼らは自分の弱さと神の力がいつでも必要なことを忘れやすい。彼らはそのようなすきにつけこまれてサタンの誘惑に負け、ペテロのように罪の深みに沈んでしまう。「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」と忠告されている(コリント第一・一〇ノ一二)。常に自分に依存せずに、キリストに信頼することが唯一の安全な方法である。

ペテロは自分の品性の欠点を知り、キリストの能力と恵みの必要なことを学ばなければならなかった。・・・

ペテロが倒れたのは、うぬぼれのためであった。そして、彼がまた立ち上がるようにしていただいたのは、悔い改めとへりくだった思いを持つことによってであった。

キ実 142, 14

うぬぼれと自己主義にみちている者は、キリストとの生きた個人的交わりを持つ必要を感じない。まだ岩なるキリストの上に落ちていない心は自分の完全さを誇る。人びとは、威厳の保てる宗教を欲する。彼らは、自分たちのさまざまな性質を持ったまま、ゆうゆうと歩ける広い道を望む。彼らの利己的で人びとにもてはやされ、ほめられることを好む気持ちが、救い主を心からしめ出すことになり、キリストのないところは、いんうつと悲哀の場所となってしまう。キリストが魂の中に住んでくださるならば、それは喜びの泉となる。神を受け入れる者はすべて、神のことばの主題が喜びであることをさとするのである。

キ実 143, 144

贖罪の働きには、とうてい人間の考え及ばない重要さが含まれている。「『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである」(Iコリント 2 : 9)。罪人がキリストの力に引きつけられて、高く掲げられた十字架のそばにいき、そこにひれ伏す時に、新しい創造が行われるのである。彼は、キリスト・イエスにあって新しく造られた者となる。聖なる神もこれ以上何もお求めにならない。神ご自身が「イエスを信じる者を義とされるのである」(ローマ 3 : 26)。そして、「義とした者たちには、更に栄光を与えて下さったのである」(ローマ 8 : 30)。罪のゆえに受けた恥辱と墮落は、たしかに大きなものであったが、贖罪の愛による栄光とほまれとは、更に大きいのである。神のみかたちに一致しようと努力する人類には、豊かな天の宝とすぐれた力が与えられて、墮落したことのない天使たちよりもさらに高い地位におかれることになるのである。

箴言 15:33 主を恐れることは知恵の教訓である、謙遜は、榮譽に先だつ。

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖ととなえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかさす』」(イザヤ書 57:15)。

大声で言った、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。一黙示録 14:7